

西濃農林事務所の普及活動状況 令和5年11月30日現在

今月の重点活動

■ 大豆 令和5年産大豆 現地検討会

令和5年11月22日にJAにしみの海津中支店において、JAにしみの主催による令和5年産大豆現地検討会が開催され、大豆生産に取り組む農業者や関係機関の職員108名が参加した。

室内研修では、農林事務所から令和5年産大豆の生育状況、JAにしみのと連携して耐裂莢性の新品種試験の状況を説明するとともに農林事務所でも実施した緑肥投入による地力向上試験を紹介した。農薬メーカーからは、難防除雑草の防除について、効果的な薬剤の使い方の説明があり、全農岐阜からは大豆の集荷状況や入札価格など情勢報告があった。また、JAにしみのから「ぎふクリーン農業」が終了するが、今後も環境負荷低減に向けて減農薬減化学肥料の取組みを続けていく重要性が生産者へ示された。

室内研修後現地研修も行われ、機械の実演の他、堆肥実証試験や新品種試験ほ場でJAにしみのからは場管理等について説明された。堆肥実証や新品種の試験ほ場では、大豆の生育状況に関心を持ち、熱心にはほ場内で大豆の莢付きなどをチェックしていた。

農林事務所では、「みどりの食料システム」の推進に向けて生産者、JAにしみのの取組みを支援していく。



【現地研修の様子】

西濃の農業・農村を支える人材育成

■ 土地利用型作物 土地利用型営農組織の法人化説明会の支援

輪之内町里営農組合では、11月5日に営農組合組合員に向けて法人化についての説明会が開催され、輪之内町、JAにしみの、アグリチャレンジセンター、農林事務所も出席した。

設立発起人より資料に基づいて、事業の目的、法人と任意組合との比較、出資金、法人化後の任意組合の取り扱い等が説明された。その後質疑応答が行われ、理解が深められた様子であった。

また、11月26日には、楡俣北部営農組合の組合員説明会も開催され法人設立の準備が進んでいる。

農林事務所では、輪之内町の集落営農組織の法人化に関係機関とともに支援を行っていく。



【説明会の様子】

安心で身近な「西濃の食」づくり

■ 大豆 収穫作業と採種ほ場で『成熟期』審査を実施

令和5年11月15日より、海津地域において大豆の収穫作業が開始された。今年は10月になって平年並みからやや低温傾向となり、大豆の落葉が一気に進み成熟期を迎えた。

また、11月17日海津市内において、県米麦改良協会、県農産園芸課、県農業経営課、JAにしみのと農林事務所職員で大豆採種ほ場の成熟期審査を実施した。

審査は優良種子の確保を目的に、県が定めた審査マニュアルに従って実施した。海津市では、市内2法人により大豆の主要品種「フクユタカ」の原種ほ4.4haと一般種子ほ63.3haが設置されており、雑草や青立ち株等が一部で見られたものの、全筆合格となった。

今後、種子の発芽率の確認などの生産物審査を農林事務所でも実施し、優良種子確保に向けた審査を行う。



【収穫作業の様子】

西濃農畜産物のブランド展開

■甘長ピーマン 栽培研究会の開催

夏野菜の甘長ピーマンは次年作の育苗が冬季に始まるため、海津甘長部会では例年11月に栽培研究会を実施している。今年は11月15日にJAにしみの海津中支店で行われた。

令和5年作では苗の状態が悪いほ場で初期の収量が大きく低下したことから、農林事務所では令和6年作に向けて健全な苗の使用を呼び掛けた。また、新技術導入事業で実施した塩類集積対策や施肥改善、今年度発生が目立ったタバココナジラミの防除対策について説明した。

自家育苗では、早い生産者で11月末から育苗が始まるため、農林事務所では育苗状況の確認などを行っていく。



【栽培研究会の様子】

■花き データ駆動型事業第3回推進協議会・データ活用研修会の開催

11月13日に神戸町のバラ生産者圃場で「データ駆動型農業の実践・支援事業」の第3回推進協議会及びデータ活用研修会が開催された。生産者6名が出席し、栽培コンサル会社の講師から11月の管理方法やCO₂施用について情報提供を受けた。また講師の方からは、生育調査の方法についても提案があった。

農林事務所では農業経営課革新支援専門員と検討した上で、当事業による環境モニタリング機器の導入後に、調査方法やデータの取りまとめについて支援していく。



【研修会の様子】

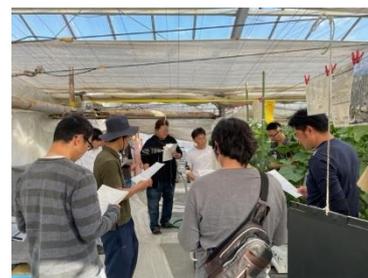
■きゅうり 海津胡瓜部会青年部・技術係視察研修の開催

11月7日、県立岐阜農林高校及び農業技術センターにおいて、海津胡瓜部会青年部及び技術係が視察研修を行った。当日は9名が参加し、実習・研究・試験について説明を受けた。

農林高校は、本年産からきゅうりの養液栽培も始めており、土耕と養液の生育・栽培管理及び収量の違いなど積極的な意見交換がなされた。さらに、生徒との意見交換では、農林事務所から土耕と養液の違いや特長について説明した。生徒から生産者へ、「どうして農業者になったか」との質問には、「忙しい時はあるけれど、自分のしたいことを農業ですることができる。そこが魅力です。」と答えていた。

農業技術センターでは、養液栽培における栽植密度や誘引方法の違いによる収量性や作業性について、熱心に情報交換がなされ、将来は、養液栽培に取り組みたいとの意見もあった。

コロナ禍の影響で4年ほど青年部の活動が停滞していたが、今回の視察をきっかけに青年部の活動が復活したことから、今後農林事務所では活動を支援していく。



【視察の様子】